

## バングラデシュの衣服あれこれ

村山真弓

## 伝統衣装の世界

インド文化圏の一部を成すバングラデシュの代表的な服装は、女性はサリ  
ーまたはシャルワール・カミーズ（膝丈くらいの上着に裾のみを絞ったゆつ  
たりしたズボンの組合せ）、男性はワイシャツとズボンあるいはワイシャツに下はルンギーと呼ば  
れる踝の上までの長さの腰巻の組合せである。ほぼそれに尽きる。もちろんデザインや色は十人  
十色であるが、スカートからパンツまで、しかもその長さや形も千差万別といった洋装の国と比  
べると、服装の種類は、きわめて限られている。

例外中の例外としてジーンズをはく女性がダッカ大学のクラスメートにいたが、彼女も上はい  
つも腰までのオーバードブラウスだった。シャルワール・カミーズには、オウナあるいはドウパッ  
タと呼ばれる細長い薄布がつきものである。それを胸から両肩にかけて後方へ流す。すごく優雅  
なアクセサリーであるが、元々は、おしゃれ的要素よりも胸を隠すための必要アイテムである。



バンラダシュ国営航空の事務所。制服もサリー

サリーにしても胸、腰、足を包み隠した衣服である。外国人の目には、どちらかというと露出したおなかが強調されるが、バンラダシュの人にも、それを気にする人は多く、サリーのスカートの部分を引き上げたり、肩からたらす部分の布でおなかを隠す努力をしたりしている。初の女性首相カレダ・ジア女史の公務中の姿を見ると、常にサリーの端の部分で頭を覆い隠すようにしている。頭から踝まで全身を覆うブルカの着用者は、ほんの一握りにすぎないものの、隠すことが、女性のあらまほしき姿であることには変わりはない。

### 子供から大人へ

男女とも子供のうちは、ズボンにスカートといった洋装で過ごす、思春期にさしかかるとルンギーや、シャルワール・カミーズの伝統衣装に変わっていく。小、中、高等学校の制服も低学年のうちには短パンにスカートだが、小学校の高学年あたりになると長いズボンとシャルワール・カミーズスタイルになる。さらに女性は学業を終えたり、結婚したりすると、サリーを日常的に着るようになる。またルンギーは通常成人男子がはくものだが、まだ十歳に満たないような少年が、丈の短いルンギーを身にまとい、日雇い労働や露天商の店

番、バザールの苦力などについているのを見るのもしばしばである。サリーとルンギーは、一人前になったことのしるしともいえる。

### 春 夏 秋 冬

常夏の国のように思われがちだが、十一月から二月くらいまでの数カ月は結構気温が低下する(ダッカで最低気温七度くらい)。とくに夜は冷え込みが厳しく、毎年凍死者が出るほどだ。そんな時期には男性は、セーターやジャンパー、女性はカーディガンやベストなど(日本の古着をよく見る)を加える。コートは必要ないが、男女ともウールや綿のショールを肩に巻き付けて暖をとることもある。この時期は、伝統衣装が見た目も機能も一番冴えない時期である。昔はこれほど寒くはなかったのかも知れない。三月の声を聞くと急速に暑くなる。春の訪れは、黄色のサリーを着て迎える。四月半ばのポヘラ・ボイシヤク(ベングル暦ボイシヤク月の最初の日、ベングルの新年)には、街角のそこかしこに黄色のサリー姿が目立つ。そして夏が駆け足でやって来る。オウナやサリーは頭からかぶれば、照りつける日差しを遮るのにも便利である。

### くつろぎ着と外出着

中流家庭以上あるいはホワイトカラーの男性は、外では洋装、家でくつろぐときはルンギーでというパターンが一般的である。女性のくつろぎ着には、ネグリジエのような長いすんとした服(ナイティ)も見かける(保守的な人はこれを着るのにもかなり抵抗があるようだ)。最も多いのは、綿のかなり着古したサリーをほとんどただ巻き付けているだけというラフな感じで身にまとうことである。家事仕事の邪魔にならぬよう、肩から

たらず端の部分ウェストのところに挟み込む。

貧しいといわれるバングラデシュだが、その余裕のない層を別にすれば、社会儀礼（例えば、結婚式、誕生日、客のもてなし）と着るものには、お金も関心もかなり高い割合で注いでいる。先に述べたように、家の中では気楽なスタイルで過ごす人々も、外出となると子供も大人も目いっぱいドレスアップする。動物園に来る家族連れが、まるで子供のピアノの発表会か入学式かと言うようないでたちでやってくる。暑い日差しが夕方の涼やかさに変わった頃、国会議事堂周辺でそぞろ歩きを楽しむ家族連れも同じである。娯楽場が少なく、とくに女性の外出が社会慣習上制限されるバングラデシュでは、動物園、公園の散策は着る機会の少ない一張羅を着て出かけるハレの場なのである。

### ダッカで洋服を買う

ところで、ダッカ住民はどこで着るものを買うのだろうか。

ダッカ市内のいたるところに洋服屋（既製服、サリー専門店、仕立屋）があるが、価格帯によって地域が色分けされている。まず高額所得者、外国人の居住区グルシヤン、ボナニの商店は、最も値段が高い。しゃれた店構えのデザ



ダッカ大学構内。ズボンとルンギー

イナードブティックなどもある。これに次ぐニューマーケット、ニューエレファントロード界わいは、店の数も多く高級品から少し安いものまで豊富な品数がある。ニューマーケットを越えてオールドダッカへ入る境の地域にバンガバザールと呼ばれるマーケットがある。ここでは日本製の古着や輸出向け縫製品の傷もの、半端ものを含めた工場からの漏出品が手にはいる。成人女性の洋服はバングラデシユでは市場がないため他のところではなかなか売っていなかったが、ここでは、ヨーロッパやアメリカに輸出されるジーンズやセーター、スキージャケットなども売られていた。旧ソ連、東欧諸国の大使館の車がよく大挙して止まっていた。バンガバザールの東には、グリスタンと呼ばれる地域がある。ここは、商業の中心モティジュールに接し、またダッカ市内バスの発着点でもある。この一帯は低価格帯の露天商が軒を連ねている。こうしてみると、ダッカの市街地が南と西の端を流れるブリガンガ川沿いの地区（オールドダッカ）から北上していったのと平行して物価も一般的に北高南低型を示しているようである。

一年のうち衣服の売れ行きが最も多いのは、イスラム教徒の二大祭（断食明け祭と犠牲祭）の前である。ダッカに出稼ぎに来ている労働者も、故郷の妻子のために買った新しい衣服をバッグに詰めて帰省のバスやフェリーに乗り込む。きっと彼らの喜ぶ顔を思い浮かべながら。

（むらやま まゆみ／アジア経済研究所動向分析部）